

4月26日（日）主日礼拝レジュメ

「聖書が与える知恵」 伝道者の書2章12, 13節

12節の後半「そもそも、王の後を継ぐ者も、すでになされたことをするにすぎない。」とは、後継者に対する伝道者の懐疑的な思いを表現しているのか？ソロモン王の後継者であったレハブアムは国の統治に失敗した。そのように後にやってくる将来的事柄についての不信を表明しているのか？むしろ、伝道者（ソロモン王）が「私は振り返って、知恵と狂気と愚かさを見た」と言っているが、次に後継として出てくる王は、自分が見出した以上の知恵、狂気、愚かさを見出すことがない、だから「そもそも、王の後を継ぐ者も、すでになされこと（ソロモンがなしたこと、見出したこと）をするに過ぎない」と言っている。それが意味しているのは、同じことをただ繰り返しているにすぎず、だれであってもソロモンと同じような結論、すなわち「空の空、すべては空」との結論以上のものを見出すことはできない、11節にありますように「見よ。すべては空しく、風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない」との結論に達するということ。

そして13節「私は見た。光が闇にまさっているように、知恵は愚かさにもまさっていることを」とあるが、光の中を歩むなら、私たちは道に迷うことなく歩むことができ、闇だと私たちの心にはさまざまな恐れや心配が出てくるが、光の中では恐れはない。また闇の中を歩めば、つまずき倒れる心配があっても、光の中を歩むならそのような心配はない。そのような意味で光は闇にまさっていると言える。同様の意味で、知恵は愚かさにもまさっている。知恵には、神から来る知恵があり、それは神のことばである聖書の言葉から来る。世の中の知恵は、私たちにこの世の中でどう生きればいいのかを教え、聖書の知恵は、人がなぜ生きるのか、人はどこから来て、どこへ行くのかを教える。さらに、聖書のことばは私たちの心に光をあてる。

聖書が与える知恵は、世の中のさまざまなものが与える知恵にまさっている。ぜひ聖書の与える知恵を自分のものにしていただきたい。